

「だめです。」

「……………」

しばらく、黙って、清姫は、また、顔を上げた。

「熊野からの帰りには、寄ってくれる?」

「もちろん、寄りますよ。」

「また、今日みたいに泊まっていつてくれる?」

「ええ、もちろん……」

「ずっと、居てくれなきゃだよ。」

「ええ、ずっと泊まっていきますとも……」

「約束だよ……」。

……まるで、一番、最初にあった頃のただっ子のようだ。

安珍は、清姫の頭を、童女をあやすように撫でた。

柔らかな髪が甘い匂いを放つ……。

安珍の目の前に、濡れた清姫の唇がある。

それが、時々むせぶように動く……。

……可愛い……と安珍は思った。

……とても甘美な誘惑……。

安珍は、清姫の背中に手を回すと、その唇に、自分の唇を押し当てた。

少し……涙の味がする柔らかな触感……。

抱きしめる清姫の身体から、だらりと力が抜けていく……。

抱えた枕が、ポロリと落ちる。

そのまま、後ろに倒れていく……。

それに、引きずられるように、安珍は、前のめりに倒れて……清姫の上に覆いかぶさる……。

清姫を自分の欲望の対象にするなど、夢の中ですら許されない……。

……安珍は、ずっと、そう思ってきたはずだった。

……僧であるため……というより……清姫は幼すぎだし、そして、何より……そういう事以上に……いまや、安珍にとっての神聖な宝物になっていたからだ……。

今、清姫は、安珍のなすがままに身をまかせている……。